

30amE-146

わが国の主要死因別の男性死亡割合の年次変動に対する年齢-時代-コホート効果
○細瀨 亜実¹, 山田 沙季¹, 内田 博之¹, 大竹 一男¹, 小田切 陽一², 小林 順¹
(¹城西大薬, ²山梨県立大看)

【目的】わが国の全死因および主要死因別（悪性新生物・心疾患・脳血管疾患・肺炎）の男性死亡割合の年次変動に及ぼす年齢、時代およびコホートの効果を age-period-cohort (APC) 分析によって明らかにすることを目的とする。【方法】男性死亡割合は、1950 年～2010 年の期間で 0 歳～80 歳以上に対し、主要死因別に性別年齢階級別死亡数を使用して算出し、コホート表を作成した。これにベイズ型 APC 分析を適用し、全死因および主要死因別に男性死亡割合に与えた年齢、時代およびコホート効果を推定した。【結果】全死因の男性死亡割合の APC 分析の結果より、年齢効果は時代効果やコホート効果に比べて大きく、10 歳後半と 60 歳前半を変化点として増大から低減に転じていた。時代効果は年齢効果やコホート効果に比べて小さく、1950 年～1970 年代前半まで増大し、その後 1990 年代前半以降穏やかに低減に転じた。コホート効果は年齢効果と同様に男性死亡割合に大きく影響し、変化点が 1990 年代前半生まれ、1970 年代前半生まれのコホートで増大から低減に、1920 年代前半生まれのコホートで低減から増大に転じていた。主要死因別の男性死亡割合の APC 分析の結果より、悪性新生物・心疾患・脳血管疾患および肺炎のうち悪性新生物の 3 効果が全死因の 3 効果と類似したトレンドを示した。【考察】全死因の男性死亡割合の年次変動における年齢、時代およびコホート効果は、悪性新生物の男性死亡割合の効果と類似しており、男性死亡割合の年次変動には悪性新生物の死亡状況が大きく寄与していることが明らかとなった。